The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 「メディア」になる、ということ : 新日本文学会第十五回大会における津村喬の大会報告をめぐって |
| Author(s) | 鎌倉, 祥太郎 |
| Citation | 待兼山論叢. 日本学篇. 2014, 48, p. 65-81 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/56616 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 「メディア」になる、ということ

## ――新日本文学会第十五回大会における津村喬の大会報告をめぐって――

鎌倉　祥太郎

キーワード：津村喬／新日本文学会／メディア／書き手／読み手

### はじめに

近年、1970年前後を軸とした、いわゆる新左翼運動をめぐる研究が展開され、現代史の一領域として歴史化しようという試みが活発になされている。「若者の叛乱」と呼ばれ、広汎な人びとを動員した社会運動や、それに伴い花開いた文化に焦点を当てることで、現在という時間との連関や断絶を見極めようとすることが、現代史の一つの課題となっているのである。

その中で、1970年頃から活発に批評活動を行っていた、津村喬（1948-）の再評価もなされるようになってきた。津村は1960年代末に、当時在学していた早稲田大学で入管闘争に関わり、1970年に最初の著作、『われらの内なる差別』を出版して以来、1970年代後半にかけて主にジャーナリズムを拠点として評論活動を行った。

新左翼運動史研究、あるいはその中で展開された思想をめぐる思想史研究で津村に触れたテクストは近年増えてきているが、[1] 最も体系的に津村の思想を考察しているのは絓秀実の諸研究においてであろう。絓は津村について、1970年7月7日の華青闘告発と結びつけながら、日本の社会運動が広範に大衆を動員して行われるデモや街頭闘争を中心とした「機動戦」から、個々の現場からなる諸マイノリティー運動を中心に展開される「陣地戦」へのパラダイムシフトを準備した人物として高く評価する。絓は「1968年」における

津村の画期性を、「他者論」の導入にみる。すなわち、新左翼におけるプロレタリア国際主義という号令のもとで展望される自国帝国主義打倒のスローガンは、ナルシシズム＝ナショナリズムに依拠した他者への排除に他ならず、そのような状況下において、オルタナティヴな運動の実践のあり方と、在日外国人問題をベースとして展開される理論を津村が提示した、と絓は位置付けるのである。[2)]

絓が述べる新左翼運動期における津村の評価に関しては、現段階における一つの到達点だといえる。だが、絓自身が「しかし、まずもって津村が賞賛されるべきは、そのジャーナリスティックな（というよりは、アクティヴィストとしての）アンテナの高さとフットワークである[3)]」と記しており、加えて「フォルマリスト」として津村を評価する以上、1970 年以降の津村の具体的な活動の場であるジャーナリズムにおける戦略を見極める必要があると思われる。つまり、津村の思想の内容と、同時代的状況とを関連付けるだけではなく、実際にジャーナリズムという場で津村がどのようにして発言をおこない、そしてそれが実際どのように受け止められたのか、ということについて分析した上で、津村にとってのジャーナリズムにおける戦略とは、どのようなものであったのかを問う必要があるだろう。

そこで、本稿では津村の「メディア」概念を中心に分析を進める。津村は「メディア」を、権力や資本による規範化をめぐる抗争の場として位置づけ、そのような場で「書くこと」「読むこと」の意味に強くこだわった。津村の「メディア」をめぐる議論を見ることによって、津村自身のジャーナリズムにおける戦略と、その広がりを展望したい。具体的な場としては、新日本文学会の大会における、津村喬による大会報告を取り上げ、津村がどのような戦略をもって大会報告に臨んだか、そしてそれが新日本文学会においてどのように受容されたのかということについて分析をおこなう。用いる資料としては、『新日本文学』1972 年 5 月号から 7 月号にかけて、三回に分けて掲載された津村の大会報告原稿「七〇年代文化革命と〈方向転換〉の諸問題」と、新日本文学会第十五回大会に関して書かれたいくつかのテクストを取り

上げたい。結論の一部をここで先取りすれば、津村の大会報告をめぐる一連の議論の内容に、見るべき部分はそれほど多く含まれているわけではない。しかし、それでもなおこの大会を取り上げる理由は、津村が提起した問題とその実践とが微妙にズレながらも、新日本文学会における読み手と書き手という関係性が問い直される契機がここにあるからだ。そのため、特に本稿の後半部分においては、津村報告がどのようなかたちで読まれ、その戦略が実践されていったのか／いかなかったのかについての分析をおこなう。そこでは、テクストに書かれた内容よりも、書くという行為そのものを問題化していくことになるだろう。

ここで、新日本文学会を取り上げるにあたって、ごく簡単に当時の状況について見ておきたい。1970年代初期の新日本文学会は、武井昭夫をはじめとする会員の大量離脱に伴い、新たな体制が作り上げられていく過程にあった。津村はそこで、新日本文学会に出自を持たない若手評論家として、活動していくことになる。今回取り上げる1972年には、編集委員として活動しており、新日本文学会に津村が積極的に関わっていた時期でもある。そのような状況にあって、津村は文学運動の戦略をめぐる報告をおこなったのである。

## 1. 津村喬の大会報告の概要

1972年4月29日、30日の二日間にわたって開かれた新日本文学会第十五回大会における津村の報告は、「七〇年代文化革命と〈方向転換〉の諸問題」と題されたものだった。60年代後半からの会員の大量離脱による危機感から、会としての「方向転換」の必要性は、ある程度共有された認識だったといえる。しかし津村報告は、会の方針の「方向転換」としてではなく、文学運動の「方向転換」という、より大きな問題を提出するものだった。

津村が掲げる「方向転換」を一言で言い表すなら、文学における内容の重視から形式の重視への方向転換、ということになる。これを、津村は「レトリックから解放的メディア作用の組織化へ」という彼独特の言葉づかいで

問題化している。ここで津村が述べる「レトリック」とは、文学における主題や思想といった内容のことを指している。一方、「メディア」という言葉で津村が指示しているのは、テレビや広告媒体といったマス・メディアや、単なる情報伝達装置としてのメディアのことではない。津村は「メディア」を、人びとの読み方を規定しているものだと捉えている。ロラン・バルトを引きながら、テクストの意味を決定するのは読者であることを強調する一方で、津村の状況認識において、メディアにおける読み方のイニシアチヴは、権力や資本が握っているのだという。「読みが社会的な定在である限り、それは組織することができる。読みを組織するのがメディアである[4)]」。津村がいう「メディア」とは、読み方をめぐる対抗的な場のことであり、そこでは書き手の意図や表現よりも、いかに読むかということが重要視される。

このように津村報告を見ていくと、その核心はテクスト論とメディア論によって構成されていることが分かる。津村においてテクストとは作者がその意味を決定するのではなく、読者の「読み」、すなわち解釈によって決定される、としている点において、構造主義が登場して以降のテクスト論が下敷きとなっている。しかし、この「読み」とは読者の個々人の主体性や主観に、完全に還元されるものではない。上記の引用にもあるように、人びとがテクストをいかに読むのか、という点に関して、津村は「メディア」がそれを組織化するのだとする。

もちろん、具体的な事例研究に基づいているわけではない津村のメディア理解が抽象的で粗いものであったことは否めない。しかし、ここで注意しておきたいのは、文学者団体の中で行われた報告において、津村が文学における現代的な問題として、文学者の創造性や表現にではなく、文学を取り巻く読み方、つまりは文学の受容に焦点を当てていることである。権力や資本がテレビや広告といったメディアを通じて行う読み方の規範化とは、「文化支配」として形象化されているのであり、だからこそ、それらの反動的なメディアを批判すれば良いというわけではなく、内面化された自分の読み方をこそ問題にするべきなのだ、というのが津村の議論である。津村がこの報告

のタイトルに「文化革命」という言葉を用いているのは、人びとの読み方を決定する押し付けられたコードを批判的に読み返す実践を「文化革命」と位置づけているからである。その意味において、津村はここで、毛沢東を読み替えている。

文学における関心が内容（レトリック）に終始するならば、どのようにいい作品が生まれようとも、「メディア作用」という一点において反動勢力に優越を許すことになる。これが、津村の問題提起であって、そのため、文学がいかに対抗的な読みを組織することができるのか、ということが、津村が掲げた課題であった、ということをこれまで説明してきた。

それでは、権力や資本とは異なる読みの組織化とは、いかにして追及するべきなのか。この点を、津村は「身ぶりの変革」という言葉によって説明しようとする。権力や資本がテクストの「読み」に関するコードを支配的に握っている、というのが、津村の現状認識であったことはすでに述べた。ここで津村が述べるテクストとは、何も文学テクストに限ったことではない。日常的な生活スタイルから人生設計、他者との関係にいたるまで、テレビや広告はあるべき「読み」のコードを提示する。メディアに対する受け手は、その「読み」を通じて、自分自身の身体の所作として日常的に習慣化することによって、認識のレベルにとどまらず、身体のレベルにおいても「読み」を内面化する。これが、津村の議論において「身ぶり」が抱え込んだ問題であり、これを反省的に捉え返していくことを、権力や資本への抵抗の戦略としたのである。

その上で、自分自身を取り巻く「読み」のコードを認識するには、「われわれ」とは異なる他者の「身ぶり」と出会う必要がある、と津村は述べる。

> 差異の発見とは、異なる身ぶりの発見である。文学の第一課題は、書く身ぶりを変革することで読む身ぶりの変革をうながすこと、読む（本だけでなくあらゆるもの、世界を）身ぶりの変革に機能しようとすることで書く身ぶりを変革することでなければならない。[5)]

新日本文学会という、文学者団体における他者とは、何よりも読者のことであるという。テクストにおける文学者と読者との関係は、例えばテクストを通じて読者を啓蒙していくような形ではもはやありえない。読者との関係において、書くという行為そのものを問い直すこと。そして書かれた内容ではなく、書くということそのものによって読者の規範的な読み方を変えていこうとすること。この相互連関的な読者と文学者との関係の在り方を作り出していくことを、津村は「読みの組織化」と呼び、新日本文学会の大会において提起したのである。しかし同時にこの提起は、反発を呼び起こしもした。次節ではこのことについて見ていきたい。

## 2. 津村報告に対する反応をめぐって

ここでは、津村報告に対しあがったいくつかの声の中から、特に否定的な反応を示した批評家の栗原幸夫について見ていきたい。

栗原が津村報告に否定的な態度を取るにあたって、決定的な契機をなしているのは、その前段階としての平野謙による津村報告への批判である。大会一日目の津村報告の後の討論において、平野は津村の報告を「非文学的」なものだとし、また平野自身がかかわる社会運動は、文学者としてかかわっているのではない、という主旨の発言をした。この発言が、大会二日目の全体討論の中で、長沼行太郎らから問題とされた（平野自身はこの討論を欠席している）。このとき、平野擁護として立ったのが栗原であり、またその中で津村報告を批判していくことになる。

以下、第十五回大会の討論の様子を描いた西原啓のテクストに見える、栗原の発言について引用してみよう。

〔…〕文学アクチュアリティ説の平野氏の昨日の発言はショックだった、そして考え、ああ、平野さんはこういうことがいいたかったのではない

か、大状況はかくかく、文化革命で行く、しかしそれで直線的に文学に行けるのか、といいたかったのではないか、そして私は中野重治さんがかつていった微小なものへの関心、佐々木基一さんの飢渇感の組織を軸にした文学を思いだしたといった。微小なものへの関心のないものは信用できない、革命的プロレタリア文学の、政治の優位性にひっついてしまう、平野さんはそういう危惧を感じたのではないか、平野さんの言葉を理解するような形で行かないと、新日本文学はだめになる、長沼さんは平野氏を敵対的にとらえ、またメディア作用を理解しないと運動はできないといっているようだが、そういうふうにもって行くのはよくあるまいと発言した。[6)]

ここで栗原は、平野が十分展開しなかった違和感のありかを、戦後に新日本文学会を中心として問題化された「政治と文学」論において語っている。栗原は平野の代弁者として、「政治と文学」における文学の自律性を担保すべしという立場から、津村報告への批判を行っているのである。

栗原発言のあと、津村報告をめぐる自身の立場表明というかたちで何人かからの発言が続いていることを西原は記録しているが、たとえば栗原と津村との間でこの討論の席上、議論が深められた様子はない。だが、栗原はこのときのことを振り返り、大会への感想というかたちで『新日本文学』に一つのテクストを掲載している。そこでは、津村の名前が直接あらわれているわけではないものの、全編を通して津村報告への違和感の表明として読むことができるものとなっている。

栗原は大会を評して、「大会での話は当然にも抽象的な大問題か恐ろしく個別的な経験的事実かということにな」り、「この二つを繋ぐ糸は見出せない」、としているが、その上で、津村のタイトルにもある「方向転換」に触れ、こう述べている。

〔…〕今度の大会報告のキーノートは、独占の側の文化支配の構造とそ

> の戦略にいかに文化革命の戦略を対置するか、ということであったと私は理解している。そのためのわが運動の「方向転換」ということであるらしい。さてそこで、この「方向転換」は成功するか？私は成功しないだろうと思う。なぜなら、この大状況論からストレートに演繹された新路線には、文学的という装いはあっても文学はないからである。[7)]

栗原が述べているのは、大状況論と作家一人一人とをつなぐ文学理論が、政治運動に従属する文学運動という域をいまだ超え出ていないということであって、「そこのところを不問に付して、「メディア作用」云々というような文学作品の流通論に流れてしまうことに、わたしとしては必ずしもにわかに賛成できないのである[8)]」ということだ。つまり、「政治と文学」あるいは「政治と文学者」という二項対立の図式の中で、その二つをどのような文学理論によって繋ぐのか、ということが、栗原がここで提出している問題なのである。

栗原から批判を受けた津村は、『新日本文学』1972年7月号掲載の「七〇年代文化革命と〈方向転換〉の諸問題」（下）に併せて掲載されている「付記――大会を終えて」で反論を試みている。このテクストでは津村報告に関する様々な意見への反論が記されているものの、さしあたり栗原の発言に関する部分に絞って検討を進めていきたい。

まず、津村は栗原が津村報告を「大状況」論として捉えていることを批判し、「「大状況」といったとらえ方そのものが誤りであり、そこにこそ「政治の優位性」論と「政治と文学の二律背反」論のナレアイの場があったのだということが、わたしが主要に証明したかったことであった[9)]」としている。権力や資本がメディアを通じて人びとの読み方に対し支配的であるという「大状況」が、主要な抵抗の目標となっているのではなく、そうした読み方を無意識のうちに内在化し、その中で欲望を再生産している状況こそを打破するのが報告の主要なテーマなのだと津村はいう。だからこそ、「われわれは、これだけは自分のものであるはずの「微小なもの」、日常的なもの、「小

さな現実」をもとめる」が、それが無反省的に、所与のものであるとされる点において「それこそがニセの具体性とよばれねばならぬものである[10)]」と津村は述べる。ここでの「微小なもの」「小さな現実」とは、栗原においては文学が描き出す対象のことであるが、津村にとってはそれが反省的な契機を含まないものである以上、権力や資本のコードを内面化しているのであって、その意味で「ニセの具体性」なのである。そして、問い直しの視点を持たない「具体性」は、人びとの日常に根差す同一化の構造＝差別の構造を不断に再生産する。ここで津村が栗原に対して再批判を試みているのは、そうした「具体性」をアプリオリなものとして捉えている栗原の認識に対してである。

栗原は新日本文学が戦後問い続けてきた「政治と文学」という問題にこだわり、文学の政治運動化に懸念を示しているのに対し、津村はそのような構図はもはや失効しているのだとする。文学における「メディア作用」を重要視する津村にあって、テクストとは人びとの読み方を組織する以上、常に政治的なものであって、政治と文学とを分別可能だとする文学観そのものが、資本や権力における「メディア作用」からなる支配体制を温存しているのだといえる。

津村の応答に対し、栗原が再び批判を加えることはなかった。二人の議論は平行線を辿ったまま終わっている。次節では、この二人のやり取りから、津村報告における「メディア」の概念とその実践について考察していきたい。

## 3.「メディア」としての津村報告

前節でみたように、津村と栗原のやり取りは終始ずれたものとなっているが、ここで注目したいのは、栗原の批判に対する津村の応答の在り方、つまり応答の形式についてである。栗原は政治に対する文学の自律性を守るという立場から、津村に対して批判をおこなった。そのため、批判の内容は津村

報告が示す文学運動の戦略論そのものに向いている。つまり、栗原の批判とは津村報告の「内容」、津村の言い方を借りれば「レトリック」に向けてなされているといえるだろう。

そして、津村の応答もまた、栗原の批判の「内容」に対して述べられたものであり、それによって自分の戦略の正しさを再主張している。このこと自体は、一般的な論争における形式と異なるところはないだろう。だが、津村の報告で述べられていることと、この津村の応答の在り方を比べてみるならば、どのようなことが見えてくるだろうか。

津村が報告において強調したことの一つは、文学における「メディア作用」の重要性であった。「メディア」としてのテクストの機能は、その内容に規定されない、ということが、津村が主張したことである。いかに革命的な内容が書かれたテクストであっても、読み手の読み方次第では反革命的なものになりうる。読み手の読みを規定しているものは何か、それに対する反省的な認識を促すことが、文学の課題なのだと津村が主張するとき、当然それは津村自身のテクストをも照射することだろう。つまり、津村報告の「メディア作用」もまた問われなければならない。

津村にたいする栗原の批判が、戦後議論されてきた「政治と文学」の枠組みの中でなされている以上、栗原における読み方——文学をめぐる認識は津村の報告によって変わらなかった、ということができる。しかし、そのことをもって津村を責めることはできないだろう。というのも、津村はテクストにおける読み手の立場を重要視しているのであって、最終的な主体性は常に読み手の側にある。このときテクストは、読み手の認識を直接変えるのではなく、読み手の読み方をめぐる認識に働きかける触媒でしかない。

しかし、そうであるならば、津村は栗原の批判に対して、自分の議論の正当性を主張するということではなく、栗原の読み方へと介入していくという方法をとる道もあったのではないか。またそれは、自分の主張を相手に納得させる、ということとも異なるものだろう。

津村は、テクストを通じて書き手と読み手の関係性を変えていくことを文

学の課題として挙げていた。しかし、栗原に対する津村の応答が報告の内容に終始し、どちらの戦略が正しいのかを主張しあうものにしかならなかったのは、津村が自ら提示した戦略が、新日本文学会という場で具体的な実践としては展開されなかったことを示している。

もう一度、津村の議論に戻るなら、津村は書き手と読み手の「身ぶり」に注目していた。書き手は「書く身ぶり」を通じて、読み手の「読む身ぶり」の変革に寄与するのだと津村は述べている。このことに注目するなら、津村の議論における書き手と読み手との関係は、単にテクストを通じた関係だけを想定しているのではないことが分かる。ここでは、書き手と読み手の身体も問題とされているのである。

ここでの「身ぶり」とは何か。そもそも、津村の認識において、メディアを通じた資本と権力の規範化は、人びとの認識のレベルにおいて機能すると同時に、それを無意識に反復することによって身体性のレベルにも作用するのだという。津村が1970年代初期に特に強調して述べている「日常性批判」とは、そのようにして習慣化された身体レベルでの規範を反省的に捉え返すことを目的としていた。「書く身ぶり」とは、そうした文学という枠内で習慣化され、身についている書き方のことであり、それへの反省的な行為をもって、規範化された読み手の読み方――「読む身ぶり」へと介入していくことが津村の戦略である。とするなら、そのようにして書かれたテクストが媒介物としての「メディア」であると同時に、書き手の身体もまた、「メディア」ということができるのではないだろうか。つまり、書き手における役割とは、自分自身の書き方を規定している権力の働きを捉え返し、書く行為そのものを変化させていくことによって、読み手の読み方を変えていく「メディア」となることだと、津村報告を読み替えることができるのではないだろうか。

栗原への応答という場面において、津村の「身ぶり」は「メディア」となっているとはいえない。しかし、津村報告をめぐる新日本文学会での議論は、『新日本文学』の読者の「読む身ぶり」を確実に変化させている。最終

節では、このことについて見ていきたい。

## 4.「メディア」になる、ということ

新日本文学会第十五回大会の様子が掲載された『新日本文学』の翌月号に、楢原理寿の「一つの疑問」という投稿文が掲載された。これは、誌面では1ページほどの小文である。「異見偏見」という、読者と新日本文学会会員とのコミュニケーションの場として設けられたこの投稿欄において、「製罐工、四十六歳」という署名を付した楢原は、「大会報告を読んで、一つどうにも腑におちないことがある」と書き始め、津村報告に対して起こった議論への違和感を表明している。

> 津村氏のユニークさは、「読み」についてそれを敵の戦略を読むとして提示したことにあるが、いまそれをおいても、自分の書きもの以外についてはどんな書き手も「読み手」であろうし、それをも「書き手」としてしか読まないのは、一つの不幸である。また、そうであってもなお、「読み」は「読み」である。[11)]

楢原は、「「受け手」を自認する私」という立場からこれを記述している。ここで問われているのは、書き手と読み手とは不断に流動的で、一時的な位置であるに過ぎず、特権化された自明の書き手という立場など存在しない、ということである。この論点は、津村報告にはっきりとは出てこない。そのため、楢原は津村のテクストを、津村を超えて読み直しているといえる。その読み直しの中で、書き手は同時に読み手でもあるのではないか、と問うことによって、楢原は固定化された書き手の立場性と認識とを鋭く衝いている。

だからこそ、大会における議論へ事後的に介入しようとしているこの記述の在り方は、津村が報告の中で述べる書き手と読み手の相互変革を実践するものとなっている。加えて、楢原は読み手の立場に立ちつつ、このテクスト

を書くという行為によって、読み手の立場からも一瞬離脱している。このことは、読み手もまた書き手になりうるということであるだろうし、その意味において、楢原は自身の読み手という立場もまた固定的なものでないことを、遂行的に示すことによって、書き手の認識を照らし出そうとするのである。この楢原の「書く身ぶり」は、栗原に対して書き手としての立場でしか応答することのできなかった津村にも向けられているのではないか。

津村報告の読み直しと、このような遂行的な記述は、津村の語法に従って「読む身ぶり」と「書く身ぶり」と言い換えることができるだろう。楢原におけるこれらの「身ぶり」を伴った身体は、読み手と書き手の関係性へと介入しようとしている。

津村報告は議論を引き起こし、楢原がテクストを書く契機となったという点で、やはり一つの「メディア」であった、ということができる。しかし、津村の報告と比較して楢原の「書く身ぶり」をよりラディカルなものとして捉えることができるのは、テクストのみではなく、書くという行為を通じて自らの身体を「メディア」として機能させているからである。「メディア」になる、ということは、主体的な方法であると同時に、自らのもつ認識や立場性を脱同一化しながら、固定化された関係性へと介入し、攪乱していくことであろう。それは、楢原が読み手という立場から発言を行いつつも、自ら書くことによって読み手と書き手の間を往還するような方法でもある。

しかし、このことを、楢原という一個人の個性に還元してよいのだろうか。楢原のテクストが生起してくる過程を考察するならば、直接的な契機に津村報告とそれをめぐる議論があげられるだろう。だが、他方では新日本文学会という場もその条件の一つに数えられるのではないか。津村報告と新日本文学会第十五回大会の様子は、感想というかたちで掲載された様々なテクストとともに、『新日本文学』で詳細に記述されている。新日本文学会の大会が読者に開かれたものであったという点において、例えば一定の専門領域を共有した人びとが集う学術会議とは異なるものだろう。読み手と書き手という関係性が『新日本文学』という雑誌上に存在していたからこそ、楢原は

硬直した関係性に異を唱えることができたのだ。そしてもうひとつ、同時代の総合雑誌やあるいは新左翼系の総会屋系雑誌とも異なる『新日本文学』という雑誌メディアの特徴も挙げられよう。『新日本文学』は文学者団体の会誌という性格もあり、会員間の議論が誌面に載る機会も多かった。また特に、1970 年代に入ってからは、事務局の動向が誌面に掲載されるようになり、団体雑誌としての性格が強まる一方、発行部数でいえばそれほど多くないとはいえ、一般読者にも会の動向が読まれる雑誌としてあった。

雑誌メディアとしての『新日本文学』に関するこれ以上の分析は今後の課題としたいが、さしあたりここで指摘しておきたいのは、『新日本文学』に読み手と書き手の関係性を「読み手」の側から問い直すことができるような条件が伏流していたということである。もちろん、楢原が批判したように、『新日本文学』の作家・評論家陣の多くはそのことに無自覚ではあった。しかし、雑誌のもつ形式的な側面においては、読み手と書き手とを隔てる壁はゆるやかに崩れていたのではないだろうか。

『新日本文学』という雑誌メディア、津村の大会報告、そして楢原の投稿文は、それぞれが位相を異にしながらも、津村が論じる意味での「メディア」として、重層的に展開している。『新日本文学』誌上で、津村を含め、管見の限り楢原への応答はなかった。しかし、それは「メディア」になる、ということが意味を持たないということではないだろう。人びとに介入していく楢原の「書く身ぶり」がテクストに刻印されているということは、今なお「メディア」になることの未完のプロセスとして、読むことができるのではないだろうか。

## おわりに

本稿では、新日本文学会第十五回大会における津村喬による報告と、それへの反応を取り上げた。この大会の内容そのものについては、現在から見て新鮮に感じる論点が豊富にあるわけではない。津村の議論は、同時代的なコ

ンテクストに置いてみるなら、構造主義を摂取した新しい思想内容を含んでいただろう。しかし、津村が状況認識としてもっていた、人びとの日常生活や身体を取り巻く権力の在り方などについては、フーコーの「規律／訓練」や「生政治」を持ち出すまでもなく、現代思想の基礎的な理論としてある。また、津村と栗原のやりとりについても、論争というには規模が小さく、内容に絞って見てみても、戦前生まれの栗原と、戦後生まれの津村という世代間対立という図式で以上には、捉えることはできないかもしれない。

しかし、本稿で注目したことは、津村の大会報告において展開された「書く身ぶり」と「読む身ぶり」の実践が、いかになされたのか、ということだった。この点に関して、結論を繰り返すならば、栗原との相互批判において、津村は「身ぶり」の実践をなすことができなかった。だが、両者のやり取りを含めた、津村報告をめぐる議論は、楢原のテクストを生起させたのであり、その点においては、対抗的な「メディア」として機能していた、ということができる。そして、本稿で明らかにしたように、楢原はテクストを書くことによって、「読み手」と「書き手」の関係性へと介入する、「メディア」になる、という実践をおこなっている。

津村が大会報告の中で提示した戦略と、楢原のテクストが実践している「メディア」をめぐる問題系は、1970年代固有の問題としてあるわけではなく、また文学固有の問題でもないだろう。津村は「読み」に関して、読まれるのはテクストだけではないとしている。だとするなら、「メディア」になるという戦略も、様々な局面においてあらわれる固定化された人びとの関係性や認識、立場性へ向かって介入し、媒介していくことで展開できるのではないか。

津村もまた、大会で報告した理論的枠組みを、入管闘争や在日外国人差別の問題といった局面においても展開している。津村の思想と実践をめぐるこの新たな展開については、今後の課題としたい。

［注］

1）　例えば、小熊英二『1968』（新曜社、2009 年）では、「第 14 章」で津村が取り上げられ、反差別闘争との関連で言及されている。また、馬場公彦は『戦後日本人の中国像』（新曜社、2010 年）の中で、津村とのインタビューを掲載しつつ、中国派知識人の一人として津村を位置付けている。
2）　絓秀実『革命的な、あまりに革命的な』（作品社、2003 年）参照。なお、絓の他の著作における津村への言及に関しては、絓秀実『一九六八年』（筑摩書房、2006 年）、同『吉本隆明の時代』（作品社、2008 年）、同『反原発の思想史』（筑摩書房、2012 年）を参照されたい。
3）　絓前掲『革命的な、あまりに革命的な』p309。
4）　津村喬「七〇年代文化革命と〈方向転換〉の諸問題」中、『新日本文学』1972 年 6 月号、p112。
5）　同上 p162。
6）　西原啓「可能性の芽」、『新日本文学』1972 年 7 月号、p185。
7）　栗原幸夫「一清算主義者の感想」、『新日本文学』1972 年 7 月号、p192。
8）　同上 p192。
9）　津村喬「付記――大会を終えて」、『新日本文学』1972 年 7 月号、p172。
10）　同上 p172。
11）　楢原理寿「一つの疑問」『新日本文学』1972 年 9 月号、p9。

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

## Becoming "Media": Tsumura Takashi's Report in the 15th Annual Conference of *the Sin-Nihon-Bungaku-kai* (The Association of New Japanese Literature)

Shotaro Kamakura

The purpose of this paper is to clarify Tsumura Takashi's theory and practice about "media". Tsumura is known as one of the representative critic and activist in the new left movement in Japan.

In this paper, I analyze Tsumura's report in the 15th annual conference of *the Sin-Nihon-Bungaku-kai*. He argued that "media" could be defined as a place of opposition to power and capital, that organized "reading" of people. And he argued that the issue of literature was to intervene in the situation of "a reading" that had been prescribed by power and capital, by the act of "writing".

Tsumura's theory caused a controversy between him and the older generation. This controversy became clear that Tsumura had failed to put into practice the theory that he presented as the strategy for the cultural revolution in 1970's, during the conference in which literally organization readers and authors gathered.

On the other hand, Tsumura's report became a medium for one reader to write a new text. The writer was one of the readers of the *Sin-Nihon-Bungaku*, and he intervened in the controversy by the act of written. In this text, he made a problem of the mutual connection between readers and writer, while questioning the obviousness of the writer's position in the controversy. In this paper, I consider that the intervening in the relationship between readers and writers signified the act of becoming "media". This act of becoming "media" was the radical praxis of Tsumura's strategy in his theory of media; and thus can be regarded as an important point in rethinking the relationship of people concerning texts on a contemporary context.